

# 鳥取東部方言アクセントの規則

谷守正寛

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第8巻 第2号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.8 / No.2

平成23年11月29日発行    November 29, 2011



# 鳥取東部方言アクセントの規則

谷守正寛\*

## Rules of Eastern Tottori Dialectal Accent

TANIMORI Masahiro\*

キーワード：鳥取方言，方言アクセント，文アクセント  
Key Words: Tottori Dialect, Dialectal Accent, Sentence Accent

### 1. はじめに

本稿は鳥取東部の方言アクセントを扱い、その規則を探る。初めて接する方言を耳にすると、聞き慣れない語彙のほかに、トーンあるいは口調がきわだって自分の言葉とは異なるのに気付くものである。筆者が接した鳥取東部方言についても、どういうメカニズムによってあるところでアクセントが上がったり下がったりするのか、いったいどういう規則に従っているのかといった問題に対する関心を引き起こし、少しく探ってみたいと思ったのが本研究のきっかけでもある。考察する方言のエリアは概ね鳥取東部ということにするが、調査した主たるインフォーマントは言語形成地が鳥取市内の30代で、両親共に鳥取市出身の生粋の鳥取東部方言話者である。したがって中部・西部での調査データからの分析によるものではない。

服部(1931)は「岡山市のアクセントも、鳥取地方のアクセントも金光地方のに似てみると云う」と述べつつ、「國語史上から見て、一つの興味ある問題」として、山陽道地方(播磨を除く)の方言アクセントについては、東京アクセントと酷似していることに国語史上初めて言及した。なお、金光地方とは現金光町(岡山県南西部)を指すとみてよいだろう。金田一(1977)はこれを受けて、中国地方のほとんど全域が東京式アクセントであると述べている。それ以降、室山(1998)においても説明されているように、「アクセントは、種類の別、体系とも東京語と同じである。」(鳥取市の方言)、「アクセントは、型の種類、体系とも東京式である」(倉吉市の方言)ということになっている。室山(1998)においては服部(1931)への言及はないが、鳥取方言アクセントが東京式であるという現在の指摘のもとを辿れば、服部の発見を受けてのことであろう。

また、広戸(1983)によれば、「因幡と東伯郡は中国地方アクセントに属する。このうち東伯郡のアクセントは、完全な一つ上がりアクセント地帯である。因幡は、東伯郡ほどの一つ上がりアクセントではないが、この傾向がある。」とある。因幡とは概ね鳥取東部を指すので、本稿で扱う方言は因幡方言に該当し、東伯郡ほどではないとしつつもこの特徴が該当することになる。

そこで、本稿では、この「完全な一つ上がりアクセント」という特徴をめぐって、これまでの知見をもとにさらに綿密に吟味しつつ検討を加え、再考することを目的とする。その中で、「完全な一つ上がりアクセント」という鳥取方言アクセントの性質に新しい考察を加える。また一つ上がりアクセントの位置についても明らかに示す。

---

\*鳥取大学国際交流センター

## 2. 鳥取東部方言アクセントの特徴

### 2.1. 一つ上がりアクセントについて

森下(1996)では、広戸(1983)を受け、鳥取方言について、「一語内の複数拍が連続して高く発音される『つづき上がりアクセント』はみられない。これは共通語アクセントの型とは異なった型の一つである」としている。さらに、一つ上がりアクセントについては「複数拍(一語内)のうちいずれかの拍が一つだけ高く発音されることをいう」としている。まず稿者が吟味するのは「複数拍(一語内)のうちいずれかの拍」という説明についてである。詳しくは後述する。

また、森下(2009)でも「東部方言や中部方言のアクセントは、一つ上がりアクセントである。(中略)語末の音節に助詞の『が』や『の』が付いた場合でも、その音節だけが高く発音される」とされる。その例として、以下の語が挙げられている<sup>1</sup>。これについても後述するが、稿者が本稿で提案する鳥取東部方言アクセントの規則とは一部相容れない。

(1) 頭 アタマガ 田舎 イナカガ 着物 キモノガ

上述の室山(1998)における鳥取市の方言に関する説明には、「2拍名詞の第一類(平板型)に続きアクセントが認められず、『鳥が』『庭が』『端が』などにおいて、格助詞の『が』の拍にピッチが移行する点は、倉吉市方言などと同様である」という補足がある。倉吉市方言についてもほぼ同じ説明として、「2拍名詞のアクセントを例にとれば、第一類の平板型が『トリガ』(鳥が)、『ニワガ』(庭が)、『ハシガ』(端が)、『アメガ』(飴が)、『カオガ』(顔が)などのように、高いピッチが格助詞の『ガ』の拍にだけ認められ、続きアクセントにならない」としている。

注意しなければならないのは、続きアクセントは後に付く格助詞の拍だけに認められるという説明からは「続きアクセントにならない」というのは、必然的に鳥取東部方言が一つ上がりアクセントになることと同義であるようにも思われるが、実はそうではないということである。「続きアクセントにならない」のは平板型のみについての特徴であり、後に付いた格助詞にアクセントが続かないことを指すのに対して、一つ上がりアクセントとは、後に付いた格助詞とは関係なく、森下(1996)によれば、一語内の複数拍のうちいずれかの拍が一つだけ高く発音されるものとされるからである。

また、「一語内の複数拍が連続して高く発音される『つづき上がりアクセント』はみられない」(森下1996)という場合の「つづき上がりアクセント」とは一語内の複数拍における事象なので、格助詞と関わる「続きアクセント」とは表現が似るが意味が異なるのである。

なお、室山(1998)は、米子市の方言については、「アクセントは、型の種類、体系とも東京式である点では鳥取市方言、倉吉市方言などと一致するが、第一類のアクセントが、

トリガ(鳥が)、ニワガ(庭が)、ハシガ(端が)、カジェガ(風が)

のように、続きアクセントを見せ、東京語平板型と全く同じになる点が特徴的である」としている。したがって、この点からも、本稿で扱うアクセントの特徴は鳥取東部におけるものと言える。

### 2.2. 文アクセント

室山(1998)においては語アクセントの説明に加え、述語が付いた場合について、「その後述語が来ると、全体が低平調になる」という言及とともに以下の例が挙げられている。(傍線部は高いピッチで発音される部分を指す。文末の斜め上方向の矢印の部分はイントネーションとみなしうる。)

- (2) トリガ トンデ キタ ガ。(鳥が飛んできたよ。)  
 ツクエノ ハシガ メゲトル。(机の端が壊れているよ。)  
 エット アメガ アッ デ。(たくさんの飴があるよ。)

(2)が興味深いのは、それまではあくまで一語内についての言及に留まり、文アクセント(sentence accent)についての言及がなかったからである。アクセントの教育に関しての言及ではあるが、上野(2003)の「これまでのアクセント教育は、LHHLのような単語の型を学習してそれを体に染み込ませることであった。しかし、そのようにして習得した型をそのまま並べたのでは、文の音調が著しく不自然になってしまう」という説明からも分かるように、実はもっぱら語アクセント(word accent)だけが扱われ、文アクセントについての記述は皆無に近い。そこへ、漠然ではあるが、述語が来ると全体が低平調になるという説明を加えたことは注目できる。

さらに、室山(1998)では、倉吉市の方言について「イントネーション」として、「疑問詞の『ダレ』『ドコ』『イツ』などが文頭に来ると、その後ある範囲までだらだらと低平調が続き、文末近くに高いピッチが現れる傾向がある」と述べている。これも文アクセントに関する説明と言える。以下がその例である。

(3) ダレガ イクカ キートンナハル カエ。(誰が行くか聞いてらっしゃいますか。)

ドコニ イクカ イッカナ キートランガ ヤー。(どこに行くか全く聞いていないがねえ。)

イツ ヒロシマエ カエンナハル カ。(いつ広島へお帰りですか。)

これについて稿者は若干の修正を提案したい。すなわち、文末近くで現れる高いピッチをイントネーションとしているが、これにはアクセントの規則が働いていると考える。(3)の文末の疑問表示の「エ」等はイントネーションとみなしてよい。しかし「キートンナハル」「キートランガ」「カエンナハル」のそれぞれ「ハ」「ラ」「ハ」をアクセントとみなせば低平調の後半のどこでピッチが唐突に上がるのかがアクセントの規則の問題として提示できるのである。室山(1998)では文アクセントとしての明確な言及はなく管見の及ぶ限りも見当たらない。これについても本稿で考察する。

### 2.3. 一つ上がりアクセントの位置

ここでは鳥取東部方言のアクセントについて、平板型では続きアクセントにならないこと、一語内の複数拍においてつづき上がりアクセントにならず、そのうちのいずれかの拍が一つだけ高く発音されること、あるいは完全な一つ上がりアクセントになることについて吟味・検証し、アクセントの上がる位置について考察を進める。

広戸(1983)では東伯郡のアクセントが完全な一つ上がりアクセント地帯であることを指摘したにとどまり、森下(1996)では一つ上がりアクセントを一語内の複数拍のうちのいずれかの拍が一つだけ高く発音されるとするにとどまった。どのような範囲で一つ上がりアクセントになるのか、いずれかの拍とはどのような拍であるのかについては明らかに述べていない。非鳥取方言話者はどの範囲の複数拍のうちどこで一拍だけピッチを上げればよいのかについては皆目分らない。

まずアクセントの表示については、必要に応じて便宜上、次の表記方法を補助的に採用する。この表示方法では、複数拍の最後の拍の上線の形状をアクセント核の有無によって区別しなくても、数字によってアクセントの型が区別できる。これは中国の日本語教材などでは広く使用されている表示方法である。(但し、本稿では丸囲み数字を表示容易なく<>で囲む。)

<1>型：1拍めだけが低い頭高型

<2>、<3>～型：1拍目のみが低く数字の表す拍数分までが高い中高型又は語末まで高い尾高型

<0>型：後に助詞が付いてもピッチが下がらない平板型

頭高型の場合、標準語ではアクセントの規則<sup>2)</sup>により高いピッチは第1拍のみに置かれる。鳥取方言は東京式アクセントなので必然的に次のように標準語も鳥取方言も第1拍のみが高い一つ上が

りアクセントになる。(カタカナ表記の上が標準語, 下が鳥取東部方言アクセントを示す。以下同様。)

箸  $\bar{\text{ハシ}}\langle 1 \rangle$       駅  $\bar{\text{エキ}}\langle 1 \rangle$   
       $\bar{\text{ハシ}}$                  $\bar{\text{エキ}}$

次に中高型, 尾高型, 平板型の場合をみる。語末の音節に助詞の「ガ」や「ノ」が付いた場合でもその音節だけが強く発音されるという森下(2009)における例(1)を見られたい。(1)の「頭」は標準語では「タマ」が高い<3>型になるが, 鳥取では助詞「ガ」が付いても「マ」のみが高いままとなる。この事実から予想されることは, 鳥取東部方言ではアクセント核のある「マ」のみが高く発音されるということであろう。そこで鳥取東部方言について次の仮規則を立てることにする。

仮規則1: アクセント核のある拍のみを強く発音する。

金田一(1977)は, 鳥取地区では「頭」は「マ」だけが強いと述べているが, 上のような指摘はない。またアクセントが上がるのは, ただ複数拍のうちの「いずれか」の拍, つまり任意あるいは不定の位置の拍においてではない。体言以外に用言の例も加えて少しく検証する。

(4) 行きます  $\bar{\text{イキマス}}$       行きません  $\bar{\text{イキマセン}}$       赤くない  $\bar{\text{アカクナイ}}$   
       $\bar{\text{イキマス}}$                  $\bar{\text{イキマセン}}$                  $\bar{\text{アカクナイ}}$

(4)において標準語ではそれぞれ「キマ」「キマセ」「クナ」が高いピッチの複数拍になる。一方, 鳥取ではそれぞれ複数拍の最後の「マ」「セ」「ナ」だけに強いアクセントがくる。つまりここでは仮規則1が有効である。ただし鳥取方言が東京式であっても方言独自のアクセント核の位置を持つ語も散見する。そのような場合には当然ながら, ピッチの上がる位置を標準語からは予想できない。

さて(1)のうち「田舎」と「着物」は標準語ではアクセント核のない<0>型(平板型)である。このような場合に鳥取東部ではどうなるのだろうか。森下(1996)では助詞の「ガ」が付いても付かない場合と変わらず, (1)が示すようにそれぞれ「イナカ(ガ)」の「カ」, 「キモノ(ガ)」の「ノ」が高く発音されるとされた。つまり<0>型の語のいずれかの拍が強く発音されるとして, 後に助詞「ガ」が付いてもその位置は変わらないとされた。このことから<0>型の語について, 複数拍の「いずれかの拍」がどこであるかについてはまだ考察されていなかったことが窺える。なお後述するが, 実は「着物」については鳥取では「モ」にアクセント核がある方言特有の語であることが分かっている。

そこでこのことについて考察を進めつつ, 次の仮規則を追加する。

仮規則2: アクセント核がない語の場合, 標準語におけるピッチの高い複数拍の最後の拍のみを強く発音する。1拍のみピッチが上がる場合はそれが強く発音される。

これは次のような<0>型の語において確認できる。

(5) 桜  $\bar{\text{サクラ}}\langle 0 \rangle$       鯛  $\bar{\text{イワシ}}\langle 0 \rangle$       鳥  $\bar{\text{トリ}}\langle 0 \rangle$   
       $\bar{\text{サクラ}}$                  $\bar{\text{イワシ}}$                  $\bar{\text{トリ}}$

金田一(1977)は, 東京式アクセントの中でも内輪東京式地域のうち鳥取地区では, 上述したが「アタマ」については「マ」だけが強いものの「カゼ」と「サクラ」は低平調であるとした<sup>3</sup>。しかし稿者が確認したところ, これらについても仮規則2に従い「アタマ」と同様に最終拍が高くなる。

## 2.4. 伝えたい意味に応じて切られた句

森下(1996)では一つ上がりアクセントの起こる複数拍とは一語内におけるものであった。上野(2003)は単語の型の学習だけでは文の音調が著しく不自然になるとして, 「句頭で上昇させ, 後は, 下げ核があればその都度下げる(なければそのまま続ける)ことを繰り返す」ことが文レベルの音調の発音練習や教育において効果を発揮すると述べている。さらに「文頭は一般に句頭であり, 文



「ガ」の高いピッチもここではリセットされる。述語が来るとただ漫然と全体が低平調になるのではなく、どこまでが低平調になるのかについて規則が働いているのである。

では<0>型の句についてさらにみてみよう。句末の「イル」「～タ」「～ダ」は<0>型である。

- (10) 鳥が居る トリガイル<0>  
トリガイル
- (11) 桜が咲いた サクラガサイタ<0>  
サクラガサイタ
- (12) 田舎が快適だ イナカガカイテキダ<0>  
イナカガカイテキダ

(10)–(12)の句はいずれも<0>型のため、仮規則2により高く発音される複数拍の最後の拍が高く発音される。このように、鳥取東部方言では一語内に限らず意味に応じて切られた句の中で、標準語においてはアクセント核のある拍のみが、アクセント核がない場合には標準語において高く発音される複数拍の最後の拍(1拍のみの場合はその拍)のみが高いピッチで発音されることが分かった。

前述したが、室山(1998)は、倉吉市(鳥取中部)の方言についてはあるが、「疑問詞の『ダレ』『ドコ』『イツ』などが文頭に来ると、その後ある範囲までだらだらと低平調が続き、文末近くに高いピッチが現れる傾向がある」とした。(3)について鳥取東部方言話者に確認すると次のようであった。稿者の挙げる規則が適用できるかみてみよう。

- (13) ダレガ イクカ キートンナハル カエ。  
ドコニ イクカ イッカナ キートランガ ヤー。  
イツ ヒロシマエ カエンナハル カ。

(13)の文末助詞が上がるのは質問・感動のイントネーションとみてよい。「イクカ」の「ク」もピッチが上がる点が室山(1998)の例とは異なるが、中部では東部でのアクセント規則とは一部異なるか、例外的なものかもしれない。(13)の第1文は標準語では次のようになる。「誰」は頭高型である。「キートンナハル」は方言形だが標準語でのアクセントを想定する。)

- (14) ダレガ イクカ キートンナハル カエ。

これを仮規則1に従って読めば、鳥取東部方言では次のようになるはずである。

- (15) ダレガ イクカ キートンナハル カエ。

しかし(15)が(13)と一致しないのはなぜだろうか。実は、「誰」は鳥取東部では標準語と違って「レ」が高くなる平板型である。つまり「鳥が」と同じく「誰が」が続きアクセントにならずに「ガ」のみが高く発音されることになる。疑問詞「どこ」「いつ」も同じく平板型なのである。

そこで、(13)を「伝えたい意味に応じて切られた句」で区切ってみる。

- (16) [ダレガ イクカ] [キートンナハル カエ]。  
[ドコニ イクカ] [イッカナ キートランガ ヤー]。  
[イツ ヒロシマエ カエンナハル カ]。

このように鳥取東部方言においては、「ダレガ イクカ」「ドコニ イクカ」の「ダレガ」「ドコニ」は単独では助詞「ガ」「ニ」のみが高く発音されるにもかかわらず、(16)では低く抑えられる。これは「ダレガ イクカ」「ドコニ イクカ」という伝えたい意味に応じて切られた句内に高いピッチの1拍が二ヶ所に存在するのが好ましくないからだと解釈できよう。同じ句内の後半の「イクカ」にアクセント核を持つ拍「ク」があり、それが優先されるのであろう。これは鳥取方言の「(完全な)一つ上がりアクセント」(広戸 1983)という性質によると言えるが、ここで新たに付け加えるべき



条件が「伝えたい意味に応じて切られた句において」ということである。この条件がなければ、どの範囲で一つ上がりアクセントが実現されるかが分からないことになる。

「トリガ」と同じく「ダレガ」の「ガ」、「イクカ」の「ク」にピッチの上がる性質がある以上、鳥取方言の特徴が（完全な）一つ上がりアクセントだというだけでは、

[ダレガ] [イクカ] … / [ドコニ] [イクカ] …

とはならないことがうまく説明できないのである。

(16)の第3文の「イツ」「ヒロシマエ」もそれぞれ単独では「ツ」「エ」が上がる。しかし「伝えたい意味に応じて切られた句」内においては「ハ」のみが高くなるのである。一つ上がりアクセントが実現されるのはこうした句においてであることをアクセント規則に付け加えなければ、

[イツ] [ヒロシマエ] [カエンナハル カ]

というふうに、各語・文節において一つ上がりアクセントが実現するという不都合が起こるだろう。

なお、文末助詞「カ」はイントネーションであるため、「伝えたい意味に応じて切られた句」においては1拍だけが高く発音されるという解釈を妨げない。

また、室山(1998)の指摘するように、文頭に疑問詞がくるためにその後ある範囲までだらだらと低平調が続くのだろうか。確認すると、次例のように文頭が疑問詞でなくとも同様の結果が得られた。伝えたい意味に応じて切られた句を[ ]で示す。

(17) [カレガ イクカ] [キートンナハル カエ]。(彼が行くか聞いてらっしゃいますか。)

[ウミニ イクカ] [キートランガ ヤー]。(海に行くか聞いていないがねえ。)

「彼」や「海」は疑問詞ではないが、鳥取東部では平板型である「ダレ」「ドコ」「イツ」とは異なり、単独では標準語と同じく第1拍が高く発音される頭高型である。しかし伝えたい意味に応じて切られた句内では後ろにくる「イクカ」の「ク」が鳥取東部では高くなるので、一つ上がりアクセントが達成されるように、(16)の疑問詞と同様に文頭の頭高型の語の第1拍が低く抑えられると考えられる。文頭に置かれたのが疑問詞である場合という条件は関係がないことになる。

こうした文頭の頭高型の語はそれ自体では鳥取東部方言でも標準語と同じように読まれる。しかし上の言語事実から、伝えたい意味に応じて切られた句にあっては後ろにくる高いピッチの拍が優先的に高く発音されるために、一つ上がりアクセントが句内で実現されるように低く抑えられると考えることができる。なお(17)の「イクカ」の「ク」が高くなるのは仮規則1によるとみてよい。

そこで仮規則4を加える。これは一つ上がりアクセントという性質に条件を加えたものである。

仮規則4：「伝えたい意味に応じて切られた句」内に高く発音される拍が複数ある場合は、後にくる1拍が優先的に高く発音される。

次の例では文頭の語の第1拍「モ」を低くしても高くしても鳥取東部方言では自然となる。

(18) モウ ヒロシマエ カエンナハル カ。

モウ ヒロシマエ カエンナハル カ。(もう広島へお帰りですか。)

これは次の2通りの句の切り方がともに自然だからであろう。

(19) [モウ ヒロシマエ カエンナハル] カ。

[モウ] [ヒロシマエ カエンナハル] カ

つまり(19)の文頭の副詞「もう」は意味に応じて「広島へ帰んなはる」の句の中に組み込まれる場合とそうでない場合がともに自然である。(13)の「誰が行くか」「どこに行くか」における「誰が」(主格)「どこに」(着点格)と動作「行く」との結びつきは、「いつ広島へ帰んなはる」の「いつ」と「帰んなはる」と同様に強い。一方、(19)の「もう」は「帰んなはる」と密着してもよいが独立

的に文頭に置かれてもよい語である。というのは「もう」は副詞以外にも感動詞として「語調を整えたり、表現を強調するために使われる語」(『学研国語大辞典』)、「ある感情や感動が高まったときに用いられる語」(『大辞林』)だからである。「もう」の後にポーズが置けることから分かる。副詞として動詞に強く結びつく場合には仮規則4が適用され、低く抑えられるわけである。

このように鳥取方言の「一つ上がりアクセント」という性質には条件が付くと言える。それが前述したように「意味に応じて切られた句内において」ということになる。実は、文献ではないがWikipediaに「鳥取県東部・中部では『いもうとが』のようにアクセント拍のみ一拍が高く、それ以外は低く発音される」という記述がある(東京式アクセント:2011年6月現在)。これは仮規則1と同義であるが、アクセント拍のみ一拍が高いという規則が常に適用されるとすれば、(17)の文頭の頭高型の語の第1拍が低くなることの説明ができなくなる。さらに、アクセント核がない場合にはいずれの拍も高く発音されないということになるが、これも観察された言語事実とは一致しない。そこで本稿ではこれまでの検証をもとにさらに考察を進め、新たな規則を構築したわけである。

## 2.5. 方言アクセントの規則とその例外等

ピッチの高い複数拍の最後の拍とは、アクセント核のない平板型の語・句の最後の拍と中大型・尾高型の語・句のアクセント核のある拍も指しうる。したがって仮規則1~4を併せれば次のように書き換えることができる。これを「鳥取東部方言アクセントの規則」とする。

### 鳥取東部方言アクセントの規則

「伝えたい意味に応じて切られた句」において、標準語で読んだ場合にピッチの高い複数拍の最後の拍のみを高く発音する。ピッチが上がるが1拍のみの場合はそれが高く発音される。その句内の複数箇所にも高く発音される拍がある場合は後にくる1拍が優先的に高く発音される。

さてしかし、頭高型についてはなお検討を要する。鳥取東部方言アクセントの規則(以下「方言規則」とする)は基本的な傾向を示し、今後の検証と改良を要することを妨げない。ここで例外を示すために(16)で扱った疑問詞を換えてみる。

(20) [ナゼ イカカ] [キートランデ]。(なぜ行くか聞いていないよ。)

[ドウ イカカ] [キートランデ]。(どう行くか聞いていないよ。)

(20)の「ナゼ」「ドウ」はいずれも標準語・鳥取東部方言ともに第1拍が高い頭高型であるが、「ナゼ イカカ」では「ドウ イカカ」の「ドウ」のように第1拍が下がらない。これは方言規則に従わないので例外が散見することは今後予想できる。ただ実は、鳥取東部では「なぜ」の代わりに「なんで」(尾高型)が広く使われる。

(21) [ナンデ イカカ] [キートランデ]。

(21)の「なんで」が一般的なために、「なぜ」が方言アクセントとしては浸透していないとも考えられる。これは今後の課題にし、本稿では基本的なアクセント規則として仮設しておきたい。

標準語でもアクセントに揺れのある語は多い。次例を見られたい。

(22) いつのまにか鳥が飛んできたよ。 [イツノマニカ] [トリガトンデキタヨ]。

[イツノマニカ] [トリガトンデキタガア]。

上の「いつのまにか」は(22)のように方言規則に合わない。しかし、興味深いことに「いつのまにか」のアクセントは『NHK日本語発音アクセント辞典 新版』(1998)によればまず<5>型として、次に<4>型として示されている。『新明解日本語アクセント辞典』(2010)でも同じであるが、さらに<1>型も載っている(これは方言では顕現しない)。『新明解』には「二通り以上のアクセントや発

音があるものは、標準アクセントとして望ましいと思われる方を先にして併記した」とある。つまり鳥取東部では「いつのまにか」に関してはやや標準的ではない<4>型のアクセント（「ツノマ」が高い複数拍となる）が優先されていると言えよう。高齢者などでは「ニ」でピッチを上げる者もいるようであるが、これは標準語の<5>型（「ツノマニ」が高い複数拍）を受けてのことだろう。

このように鳥取東部方言においてもアクセントの上がる位置に揺れがあることが分かったが、標準語においても同様にそうした語に二通り以上のアクセントがありうるというのは興味深い。もっとも、標準語の二通り以上のアクセントを持つ語がそのまますべて方言に入り込み、それぞれが上のように対応しているとは現段階では言えないが。

イントネーションが関係する場合もある。

(23) 学生です。                   ガク<sup>↑</sup>セイ<sup>↑</sup>デス。

  ガクセイ<sup>↑</sup>デス。

(24) 元気です。                   ゲン<sup>↑</sup>キデス。

  ゲン<sup>↑</sup>キデス。

(23)では方言規則が有効であるが、(24)では文末の「ス」が上がり、文全体が伝えたい意味に感じて切られた句であるからアクセントが2つ上がるのは例外的に見える。「地元の人が『隣の地域はアクセントが違う』」というときの『アクセント』は、研究上の『アクセント』よりも広い意味を含んでいる（木部 2010）ように(24)の「ス」はこの広い意味でのアクセントであってイントネーションに近い現象であろう。よって(24)においても(23)と同様に方言規則が有効であると考えられる。

## 2.6. 複合名詞のアクセント

複合名詞のアクセントを観察するとお吟味できることがある。ここでは詳述しないが標準語の複合名詞については前部要素と後部要素のアクセントは複合した後ではいくつかのパターンで変化する。谷守(2011)では複合名詞の例を取り上げて、以下のように、標準語におけるアクセント核を持つ各語（前部要素と後部要素）の拍の位置が大幅に移動しても鳥取方言でのピッチの上がる位置がアクセント核（格がない場合は高いピッチの複数拍の最後の拍）の位置と一致することを示している。（鳥取方言での読みを→の後に示す。以下同様。）

(25) (白兔海岸) はくと+かいが<sup>↑</sup>ん=はくと<sup>↑</sup>かいが<sup>↑</sup>ん → はくと<sup>↑</sup>かいが<sup>↑</sup>ん

(26) (町内会) ちょうない+かい=ちょうない<sup>↑</sup>かい → ちょうない<sup>↑</sup>かい

(27) (流通米) りゅうつう+まい=りゅうつう<sup>↑</sup>まい → りゅうつう<sup>↑</sup>まい（以上、谷守(2011)より）

『NHK日本語発音アクセント辞典 新版』では複合名詞のタイプについて、(25)のようなA型、(26)のようなB型のほかに、「後部要素のアクセントをいかす複合名詞」を区別している。(27)はアクセント核のない例だが第3のタイプに入る。言うまでもなく、後部要素のアクセント核がいかされる場合にも、次例のように鳥取東部方言では規則通りにピッチが上がる。

(28) (電気自動車) でんき+じどうしゃ=でんき<sup>↑</sup>じどうしゃ → でんき<sup>↑</sup>じどうしゃ

同辞典によればB型とは「前部要素の最終拍まで高い型」であるが、(26)では「ちょうない」の「な」までが高いためにB\*型として区別・細分している。これは特殊拍<sup>4</sup>にアクセント核がこないためであるがこれも方言規則に従った。以下のように通常のB型の複合語についても鳥取東部ではアクセント核のある拍でピッチが上がる。

(29) (鳥取駅) とっとり+えき=とっとり<sup>↑</sup>えき → とっとり<sup>↑</sup>えき

次の例は稿者が気づいた例外である。

(30) (山本先生) やまもと+せんせい=やまもとせんせい → やまもとせんせい  
 これはおそらく、標準語ではなく京阪アクセントを受けての現象ではないかと思われる。なぜならば関西方言では次のようになるからである。

やまもとせんせい

このように京阪アクセントでの下げ核のある拍のみを上げて読む語もあるようである。ほかにも、京阪式と同じく、茄子では「す」を<sup>5</sup>、鱈では「れ」を上げることもできる。

さて、例えば複合語「大学生」については標準語では次のように二通りが示されている。

(31) 大学生 ダイガクセイ ダイガクセイ<sup>6</sup>

これが鳥取東部方言では(32)のようになる。

(32) 大学生 ダイガクセイ

(22)の「いつのまにか」について、複数あり得るアクセント核のいずれか一方が反映している語もあることを指摘したが、(31)のような場合に方言ではいずれの位置で高く発音されるかが分かりづらいのである。ところが「大学院」の場合は標準語では次の1タイプである。

(33) 大学院 ダイガクイン

すると鳥取東部方言でも揺れることはなく(34)のように「ク」で上がる。

(34) 大学院 ダイガクイン

こうした複数のアクセントのパターンを持つ語の調査も今後の課題としておく。

さて、(35)の複合語は特殊拍にもアクセントがくるという上野(2003)で挙げられた例である。これを鳥取東部方言話者に確認すると次のようであった。

(35) お坊さんたち	オポーサンタチ
	オポーサンタチ
お母さんら	オカーサンラ
	オカーサンラ
伊東市	イトーシ
	イトーシ, イトーシ
汽水湖	キスイコ
	キスイコ

このような希用語では鳥取東部方言では特殊拍にアクセントがくるのを避けつつも、興味深いことに、必ずしも特殊拍の前の拍に移るのではなく後ろにくる場合がある点で標準語と大きく異なる。「伊東市」のように長音を高く上げることも可能であるのは独特であろう。二重母音の副音「イ」の場合は標準語と一致した。このように今後も例外的なパターンは見出せることが十分予想される。

窪菌(2006)は「人間の言語に広範囲に観察される一般的な原理」の一つとして「軽音節より重音節がアクセントを引きつける」ことを挙げているが、(35)の例からは「サン」という重音節にアクセントが置かれなことから、とりあえず本稿では「重音節」という用語は使わず、「拍」(又はモーラ)という用語で説明を行った。これも今後の検討課題であろう。

### 3. まとめ

本稿では鳥取東部方言アクセントについて、これまでの貴重な知見をもとに検証を行いつつ吟味した。語アクセントにとどまらず、文アクセントについても考察を進めなければ、方言の特異なアクセントのパターンは解析できないことが分かった。そこで「伝えたい意味に応じて切られた句」

という範囲でアクセントのパターンをみることの重要性を説き、その根拠を示した。また、鳥取方言でピッチが上がる場所が「アクセント核のある拍」だけに限定せず、「ピッチの高い複数拍の最後の拍」という言い方で、アクセント核のない場合でも鳥取東部ではどこで高く発音されるかを説明できるようにした。その上で、本稿ではアクセント規則を以下のように設定した。

#### 鳥取東部方言アクセントの規則

「伝えたい意味に応じて切られた句」において、標準語で読んだ場合にピッチの高い複数拍の最後の拍のみを高く発音する。ピッチが上がるが1拍のみの場合はそれが高く発音される。その句内の複数箇所が高く発音される拍がある場合は後にくる1拍が優先的に高く発音される。規則に合わない例外も散在しうることを示したように、規則のさらなる精査は今後の課題とした。

#### 参考文献

- 上野善道(2003)「アクセントの体系と仕組み」『朝倉日本語講座3 音声・音韻』第4章. 北原保雄監修, 上野善道編. 朝倉書店.
- 窪菌晴夫(2006)『アクセントの規則』岩波書店.
- 木部暢子(2010)「方言アクセントの誕生」『国語研プロジェクトレビュー』No. 2. 大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国立国語研究所.
- 金田一春彦(1977)「アクセントの分布と変遷」『岩波講座 日本語 11 方言』岩波書店.
- 谷守正寛(2011)「とっとりのお国言葉」『鳥取県まるごと読本』鳥取県他企画編集. 今井出版.
- 服部四郎(1931)「国語方言アクセント概観(二)」『方言』1(3). 春陽堂.
- 広戸惇(1983)「31鳥取方言」『全国方言辞典〔1〕— 県別方言の特色』(平山輝男編著) 角川書店.
- 室山敏昭(1998)「県内各地の方言」『日本のことばシリーズ 31 鳥取県のことば』(平山輝男編著) 明治書院.
- 森下喜一(1996)「鳥取県青谷町方言アクセントの特徴について」『鳥取大学教育学部研究報告 人文・社会科学』第47巻第2号. 鳥取大学教育学部.
- 森下喜一(2009)「鳥取県」『都道府県別全国方言辞典 CD付き』佐藤亮一編著. 三省堂.

1 本稿ではアクセントのある部分に付ける傍線を、原稿作成上の都合により連続させずに文字単位毎に付した。

2 『NHK 日本語発音アクセント辞典 新版』(1998)では、共通語のアクセントの特徴を二つあげるとすればとして、高いところは1拍か、そうでなければ連続した拍であること、第1拍が高ければ第2拍は低くなり、逆に第1拍が低ければ第2拍は高くなることを挙げている。

3 金田一(1977)では次のように表記している。カゼ サクラ アタマ

4 上野(2003)では、「イ(二重母音の副音), 一, ン; ッ」とある。

5 「茄子(なすび)」では標準語と同じ「な」を高く読むこともあり、揺れが認められる。

6 『新明解国語辞典第六版』(三省堂 2007)ではこの順番で掲載されているが、前述の2つの辞典はいずれも逆の順で掲載している。

